

長期に渡る経験を跡づけ、吟味する  
-実践研究のあり方の探究と新たな言語教育への提起-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: モスタファ, ヤスミン, 半原, 芳子, Mostafa, Yasmine, Hanbara, Yoshiko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10098/00029081">http://hdl.handle.net/10098/00029081</a>

## 長期に渡る経験を跡づけ、吟味する

実践研究のあり方の探究と新たな言語教育への提起

モスタファ・ヤスミン・サーミー・ガマル・エルディーン, 半原 芳子

### 実践研究のあり方への問い(半原芳子)

本稿では、モスタファ・ヤスミン・サーミー・ガマル・エルディーンさん(以下、ヤスミンさん)と共に、ヤスミンさんの長期に渡る経験を跡づけ、吟味することを試みる。ヤスミンさんと私(半原)が足場とする日本語教育の領域では、近年、外から「客観的」に観察し分析する「研究」のあり方を見直し、教師(実践者)の成長を支える「実践研究」への注目が高まっている。しかし、そのあり方については模索が続いている。

福井大学大学院連合教職開発研究科では、専門職としての教師の生涯にわたる成長と専門的力量形成を支えるため、「長い実践の歩みを語る記録」と、「その実践の歩みの省察と解明を通しての新しい実践研究の形」を追求し、「長期実践研究報告」を要としたカリキュラム編成を行っている。今後、日本語教育の分野で「実践研究」を展開していくために、そしてなにより我々自身の専門的力量形成を培っていくため、本稿では長期実践研究報告を協働で作成することを試みた。具体的には、ヤスミンさんがこれまでの教師教育経験をふり返し、記述し、半原が読み手(聴き手)となり同行した。ヤスミンさんと半原の間で何度もやりとりを行い、幾重もの問いを交わし合い、時間をかけ、ヤスミンさんが長期実践研究報告を作成した。以下は、ヤスミンさんが2004年から現在までの長期に渡る教育経験を跡づけ、吟味した記録である。

### 三カ国を通して見る教師としての経験と学び(モスタファ・ヤスミン・サーミー・ガマル・エルディーン)

### I. 概要

私はこれまでエジプト、日本、サウジアラビアの三ヶ国で、主に語学教師(日本語教師と英語教師)の経験を積んできた。2004年7月にエジプトのアインシャムス大学外国語学部日本語学科を卒業後、同年7月にカイロにあるNarita Academyという日本語教育機関で、日本語教師として4ヶ月間勤めた。2005年4月にアインシャムス大学大学院に進学すると共に、同大学の助手を勤め、翻訳の授業を担当した。

2006年4月から日本の文部科学省の国費留学生として名古屋大学に留学し、そこで「異文化コミュニケーション論」という授業のティーチング・アシスタントを勤めた。また、この授業で学生が書いたレポートをまとめた『Tasting Japanese Culture: Through Diverse Interpretation』<sup>1)</sup>という本の編集を行った。さらに、ムスリムの留学生と日本人学生・教員の相互理解の一助になるよう『ムスリムの学生生活—ともに学ぶ教職員と学生のために』<sup>2)</sup>という本の翻訳を担当した。同時期「IEN イングリッシュスクール」で英語教師として働いていた。2010年に札幌市に引っ越してからは、幼稚園や保育園、高校、英会話教室等で英語教師として働いた。また、陸上自衛隊千歳駐屯地にて、自衛隊への英会話講座を担当した。

2015年12月にエジプトに帰国してからの半年間は、アインシャムス大学外国語学部日本語学科にて講師として勤めた。そこでは、当学科の助手を勤めながら修士課程に在籍し研究する大学院生の修士論文のサポートを行った。

2016年10月から現在に至るまで、サウジアラビアのフーフ市にあるNADA インターナショナルスクールに、

英語教師として勤めている。そこではイギリスのオックスフォード大学のカリキュラムに従った最新の教授法で、読解、作文、聴解、文法等を教えている。

以上が私の教育経験のあらましである。以下、それぞれの地域や機関での経験とそこでの学びを詳細に述べる。

## Ⅱ. 語学教師としてのキャリアを開始する[エジプト] (2004年～2006年)

### 1. 民間の日本語教育機関で試験対策の講座を担当し、教師としての自信を持つ

2004年にアインシャムス大学外国語学部日本語学科を、第1期生として首席で卒業した。卒業後思いがけない連絡があった。それはカイロ市にある Narita Academy という日本語教育機関の経営者からのもので、同 Academy で日本語を教えてほしいという打診であった。大学を卒業したばかりの私にとって、卒業後すぐに日本語に関係する仕事ができることは、それがたとえアルバイトであっても非常に嬉しいことだった。そのため、喜んで引き受けることにした。

Narita Academy はエジプト人の経営者による民間の日本語教育機関で、昼間はアラビア語講座、夜間は日本語講座を開いている。私は夜間の日本語能力試験対策講座を担当することとなった。受講者の多くは、当時エジプトで日本語学科を有していた2つの大学（アインシャムス大学とカイロ大学）への入学を希望したものの、それが叶わなかった学生たちであった。彼らは、昼間は自分の大学に通い、夜間はそこで日本語を学んでいた。その他にも、日本と関わりのある学生や社会人が通っていた。例えば、日本に留学が決まった学生が日本で困らないよう初級講座を受けたり、日本に留学していた学生が帰国後日本語を忘れないよう日本語の勉強を続けたりしていた。講座の種類も豊富で、日本語をゼロから学びたい人向けの初級講座もあれば、中級や上級の講座もあった。私は2級および3級の日本語能力試験対策講座を担当していた。当時大学を卒業したばかりで日本語の知識がまだ十分にあつたため、その講座は私にとって非常にやりやすいものであった。自分が大学で使っていたノートを参考に、日本語を学ぶ際自身が気をつけたり大事にしたりしていたことを生徒たちに率直に教えた。私は文法が一番大事だと思っている。文法が分からなければ文章を読むことができないからである。そのため、教える時には特に文法に力を入れた。読解は一字一句分からなくても、全体の意味を

把握していくように練習させた。当時まだ若かったこともあり、自分より年上の受講者には緊張した。

日本語能力試験の結果が出る時期になると、受講生たちから「試験に合格した!」との連絡があった。それは教師として初めての成果が得られたようでもあり、自分にとってとても価値があるものだった。教師として自信を深めつつあったが、自身の日本語能力試験1級の勉強や、日本の文部科学省の国費留学生となるための大使館の試験の勉強等で忙しくなり、Narita Academy の仕事を辞めることとなった。

### 2. 大学で翻訳の授業を担当し、教師という仕事の難しさを知る

Narita Academy で仕事をしている間の2004年9月、アインシャムス大学大学院日本語研究科に進学した。大学院生として研究する傍ら、2005年4月から同大学の日本語学科の助手を勤めることとなった。エジプトの大学の規程では、助手は単独で授業を受け持つことができず、専任講師の手伝いが主な仕事となる。外国語学部のような言語が主要な科目の学部の場合は、助手は第二外国語の授業を担当することができる。しかし、アインシャムス大学外国語学部では、日本語学科以外の学科で日本語が第二外国語とされていなかったことから、私は主に専任講師の手伝いを行っていた。

外国語学部は言語学、翻訳、文学の3つの分野を教えるところである。アインシャムス大学外国語学部は、語学の才能のある学生を輩出することを目的としており、文学よりも言語学や翻訳を教えることが重視されていた。当時外国語学部には日本語学科に加え、英語やフランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語、韓国語、中国語等、数多くの学科があった。卒業生たちは語学の才能に長け、多くが翻訳・通訳者や語学教師、大使館での秘書として働いていた。海外、特にアラブ諸国からの要請が多く、エジプト出身で語学教師の公募となれば、外国語学部卒業者が条件になることが多かった。

当時の私は助手になったものの、まわりは日本人の先生ばかりで先輩もいなかった。非常勤講師として、カイロ大学文学部日本語日本文学科よりエジプト人教員が数名呼ばれていた。文法、漢字、読解、聴解および作文は日本人教員が担当し、翻訳は非常勤のエジプト人教員が担当していた。そうしたなか大学院が開設され教員の負担が大きくなるなかで、日本語⇄アラビア語の翻訳の授業を、私と他の助手が担当するという例外的な措置が取られることとなった。嬉しい気持ちよりも不安の方が大きかつ

たが、学生とは先輩・後輩という身近な関係をつくりながら、なるべく正確に情報を伝える授業を心がけた。

翻訳は、一般的に「交流や情報交換のために、ある言語から他の言語に文を訳すこと」と思われがちであるが、そればかりではない。各言語の特徴やその言語を話す人々の文化・習慣といった背景を念頭に入れなければ正確には訳せない。学生たちの場合、「日本」についての知識がまだないことが大きなハードルであった。一字一句訳す方法だと、まさに変な仕上がりとなった。さらに、授業を進めるなかで思いがけないことや、こちらが当たり前だと思っていたことに関して学生から質問されることが度々あった。学生はそれぞれ異なった考え方をもち、情報の捉え方も様々である。彼らの質問や疑問に対し、どうやったら適切な説明ができるか悩んだ。

大切にしたのは、学生たちが日本語とアラビア語の両言語の構成の違いを意識すること、そして、翻訳する際元の言語ではなく目標言語で考えることである。日本語の語順や文の構造を分析しながら、それらをアラビア語と比較したり、長い文では意味が乱れないよう適切な切れ目を探したりする練習を行った。そうした工夫のなかで、学生は徐々に簡単な文章が訳せるようになっていった。

助手として学部学生に翻訳を教えたのは1年弱であったが、この仕事を通じ、教師という仕事は簡単なものではないことが分かってきた。同時に、自分よりも相手、すなわち学生が大事であるという責任感が自分のなかに生まれてきた。

### Ⅲ. 異なる教育観との出会いや、幅広い世代の教育とのかかわりのなかで視野が広がる[日本](2006年～2015年)

#### 1. 英語の学習塾で異なる言語学習観に出会う

2006年4月、在エジプト日本大使館の推薦を通じ、日本の文部科学省の国費留学生として名古屋大学に留学することが決まった。名古屋大学では、まず研究生として1年間勉強し、それから大学院に進学した。その間自身の英語力を生かし、2006年から2008年まで、名古屋にあるIEN イングリッシュスクールという学習塾で、英語チューターのアルバイトを行った。この学習塾には英語のクラスの他に、日本文化や教科学習(理科や数学等)のサポートクラスもあった。塾には、小学生から高校生までの子どもたちが、主に英語を勉強する目的で通っていた。自ら勉強したいという意欲的な子もいれば、母親に通わされ

ている子もいた。私はこの塾で初めて日本人の子とも触れ合った。子どもたちのなかには、恥ずかしがりやの子もいれば、自信を持って何でも知りたがる子もいた。

なぜ日本人は子どもに英語を学ばせたいのか、その疑問を塾長に尋ねると、「日本人はアメリカやアメリカ人に憧れている。また、来日する外国人も増えたため、英語が話せないとなかなか外国人とコミュニケーションができないから」という返事であった。では、何を中心に、何を目指して英語を学ぶのか。その問いへの塾長の答えは、「会話だ！会話ができれば外国人とコミュニケーションが取れる」という、私にとってあまりにも衝撃的なものであった。塾長の答えを受け止めつつも、正直あまり納得できない部分があった。私は文法や文の構造が分からなければ、会話ができないと思っている。それを知らずして、週1回の1時間ほどのレッスンでどうやって英語で会話ができるようになるのだろう。また、エジプトでは、新しい言語を学びたい場合、文化センターの講座で、文法や文型を学ぶことから始める。塾長の返答から、国や文化、人々のニーズにより、語学学習についての考え方や方法は違うのだろうと思った。

はたしてこの塾で、自分はどのように英語を教えたらよいのだろう。会話を中心に学ぶならば、発音から始めるべきだと考えた。なぜなら、発音が明確でないと、誤解を招く可能性があるからだ。しかし、いくら生徒たちの発音を直そうとしても、実際はなかなか直らなかった。「いったいなぜだろう」と思い生徒たちが持っている英語のテキストを見ると、そこには驚くべき事実があった。英字の上に、読み方(発音)がカタカタで書かれていた。つまり、生徒たちはアルファベットが分からなくてもルビのカタカタを読み、それが英語に近い発音になっていたのである。これは何とかしなければならないと思った。私はスペリング(つづり)と発音の間にある法則を学ぶ「フォニックス」を重視した。生徒にはなるべくカタカタを隠し、フォニックスに従って英語を読んでもらうよう工夫した。そして、私が先に言葉を発音し、生徒たちにそれを真似してもらおうよう促したりした。会話を学びたいなら発音が大事であることを、生徒たちに分かってもらいたかった。

#### 2. 「異文化コミュニケーション論」の授業で、自分とは異なる相手の「当たり前」を大事にすることを学ぶ

2009年4月、名古屋大学大学院博士後期課程に進学した。その後、同大学留学生センター(現在は国際教育交流センター)の留学生アドバイザーである田中京子教授から、ティーチング・アシスタントの依頼があった。私は

2008年に出産して以降、育児とのバランスから研究以外のことはしばらく控えていた。しかし、子どもの成長とともに生活も落ち着き始めており、その話を引き受けることにした。

それは「異文化コミュニケーション論」という授業で、名前の通りブラジルや中国、フィリピン、スリランカ等、異なる言語文化背景を持つ世界各国からの留学生が集まる授業であった。授業では、学生たちがそれぞれ自分の国の文化や習慣について英語でエッセイを書く。私はその添削を任された。また、授業ではエッセイだけでなく、日本に来て驚いたこと、悲しかったこと、思いがけない出来事等、毎週1〜2名の学生が自分の経験を発表した。発表が終わるとペアやグループになり、その内容について話し合い、次に全体で意見交換をした。それらの活動を通じ、学生は自分の国との類似点や相違点を考えることとなる。私はディスカッションに参加しながら、英語のサポートを行った。また、授業では時々ゲストスピーカーを呼び、そのゲストの国の文化や習慣について話してもらった。その時も同様に、皆で意見交換をした。授業で使用した資料をもとに学生たちがレポートを書くこともあり、その添削も私の役目であった。

大学の授業でもあることから、参加する学生たちは皆成熟した大人で、それぞれが自分なりの考え方や生き方を持っていた。私たち人間は、すぐに自分の枠組みで相手を判断する傾向にある。「異文化コミュニケーション論」の授業では、自分とは異なる他者との間で何か問題があっても、すぐに判断の段階に至らないようにすることが大事にされた。相手の行動の背景にあるものを考え、その相手の行動を理解し受け入れるよう努めた。

この授業に参加して初めて、自分にも偏見があることに気づいた。それは特に、母国の国民に対する見方であった。同じ国であっても、地域によって「当たり前」が異なる。例えば、公の場では手で食べてはいけない、フォークとナイフで食べなければならないというマナーで育った私にとって、公の場で、手で食べている人を見かけると大きなショックを受けていた。礼儀正しくない、下品だとさえ思っていた。それは上品や下品といった問題ではなく、文化や習慣の違いなのである。この授業を通じ、自分にある見方や考え方に気づくと同時に、自分のなかにある偏見と対峙しながら異なる他者を受け入れる姿勢を学んだ。

「異文化コミュニケーション論」での気づきは、自身の教育観にも影響を与えた。異なる文化や枠組みを持つからこそ、物の捉え方や情報の処理のし方が異なるのである。その人なりの考え方があり、それに合ったアプローチ

が必要である。以前学習塾で英語を教えていた時の自分の疑問が、氷解していくようだった。今後はそれぞれの学生に合ったアプローチを提供すべきだと思った。

年度が終わりに近づく、学生たちが頑張って書いたエッセイを本にまとめて出版しようという提案が田中教授より出された。私は学生たちのエッセイを添削し、一冊の本にまとめて編集する作業を任された。先生と相談しながら、その本に”Tasting Japanese Culture: Through Diverse Interpretation”というタイトルを付けた。いろいろと調整しながら本を出版に至る段階まで仕上げるのは、貴重な経験となった。

また、当時、名古屋大学では留学生の数を増やすプロジェクトが進んでおり、そのなかでイスラム教およびイスラム教徒の文化を紹介する試みを田中教授が始めていた。様々な国のイスラム教徒から情報を集め、私はその翻訳を行った。田中教授と相談しながら、その情報を集めた資料集に『ムスリムの学生生活—ともに学ぶ教職員と学生のために』というタイトルを付け、日本国内の大学や教育機関、海外の大学に配布した。

イスラム教を知らない人に、イスラムに関する知識や教養をイスラム教徒の声をもとに紹介するこの取り組みは、異なる背景や価値観を持つ人たちの交流、さらに言えば両者(異文化間)の教育に間接的に携わった経験だと言える。時間もかかったが、今手元にある資料集を見るたびに、きっとどこかでこの資料集でイスラム文化について学んでいる人がいると思うと満足感を覚える。

### 3. 多様な世代への教育にかかわり視野を広げる

#### 1) 保育園と幼稚園で英語を教える

2010年4月、主人の仕事の都合で北海道の札幌市に引っ越すこととなった。当時、私は名古屋大学大学院博士課程後期課程の2年生で、様々なことが軌道に乗り始めた時期だった。そのため、大学や友達、先生方から離れることに対し大きな不安を抱いた。

実際引っ越してから数か月は研究が一步も進まなかった。研究だけではなく学内外で様々な活動をしてきた私にとって、ずっと家で勉強ばかりする生活は耐えられなかった。その深刻な状況を乗り越えるため、何か仕事をしたいと考えた。友人の紹介で2011年から2015年までハックルベリーという英語教師派遣会社を通じ、多くの保育園や幼稚園で週に3〜4日英語を教える経験をえた。児童発達支援事業所「めばえ保育園」という特別な保育園にも訪れた。また、月に2〜3回ゲスト講師として、児童会

館や学校などで小学生に英語を教えることもあった。

幼稚園や保育園では「英語を教える」よりも「英語で遊ぶ」ように、子どもたちと歌を歌ったり、踊ったり、カードを見ながら季節の言葉や天気について話したりした。毎週、色や家族などテーマを決め、カードを使ったり、身振り手振りをしたりしながら、なるべく英語のみで子どもに説明した。子どもたちは嘘が付けなくても正直な人間である。嫌な場合は、嫌な顔をしてまったく関心を示さない。子どもたちの興味・関心を大事にすることが最も重要であり、それは私にとって大きなチャレンジであった。遊びながら英語を学ぶ。一見とても簡単そうで、あまり準備が要らないと思われるかもしれないが、これまで学問的なやり方に意識が向いていた私にとって、それは決して簡単なことではなかった。

子どもたちは何かを好きになったら、それができるようになるものである。なるべく英語の時間を楽しくしようと、教育的で面白い音楽、テーマに沿った様々なカード、季節に合った絵本などを用意した。そして、子どもたちが快適で楽しい時間が過ごせるよう工夫した。英語であいさつができるようになるよう、必ず「挨拶の歌」で始めるようにした。そして最後に、いつも子どもたちが楽しみにしている「リラックスタイム」を設けた。そこでは主に、子どもたちが選んだ英語の絵本の読み聞かせを行った。

子どもたちの目に映る「楽しい」という気持ちや、私への親しみの気持ちを最も大切にしたい。そうした子どもたちの目を見ると私も落ち着き、とてもリラックスした雰囲気子どもたちと遊ぶことができた。ハロウィーンの日にはハロウィーンのカードや絵本を、クリスマス時期にはクリスマスソングや絵本を紹介し、子どもたちに少しでも特別なお祝いの季節や行事について知ってもらおうとした。毎週英語のレッスンを心待ちにしている子どもたちの期待に応えることが、私にとっての大きな責務であった。楽しみに待っているレッスンがつまらなさと英語への関心が低くなり、続けたくなる恐れがある。保育園と幼稚園での5年間で学んだことは、常に別の計画、いわゆる「プラン B」を持つことであった。なぜなら、自分が計画していたテーマが、その時の子どもたちの関心に合わなかったら、別のことをする必要があったからである。

「めばえ保育園」は、児童発達支援事業所であり、普通の保育園とはやや違う接し方が必要であった。とても頭がいい子もいれば、少し乱暴な子もいた。子どもたちの様子や状況が変わるなかで、自分を調整することがとても重要なことであった。乱暴な子どもが、次の瞬間とてもお

となしくなることもあった。しかしながら、この保育園の子どもたちと私はとても仲良くなった。私の膝の上に座る子もいた。「めばえ保育園」での時間はとても貴重な経験であった。ここで、状況に応じ自分を調整することを学んだ。

## 2) ALT として高校で英語を教える

保育園や幼稚園とは別に、市立札幌大通高等学校という自由な校風を持つ定時制高校で、数か月外国語指導助手 (ALT) として働いた。そこでの経験はあまり長くなかったが、高校生の学校生活に触れることができ、とても良い経験であった。

英語の授業のサポートや、生徒たちとの英語での自由会話、そして日本人の先生が担当する英語の授業でのグループ活動に生徒と一緒に参加したりした。英語に関心がありとても熱心な生徒もいれば、私の存在に不安を抱く生徒もいた。私は、私の存在を不安に思う生徒たちを必要以上に気につけないよう心がけた。そうすることで、自然に距離が近くなる生徒もいたが、そのまま私との距離を保ち続ける生徒もいた。

## 3) 自衛隊に英語を教える

2012年、知り合いから自衛隊の英会話講座を担当するスクールを紹介してもらった。そして、北海道の千歳駐屯地で仕事をする事となった。千歳駐屯地の自衛隊は、アメリカ軍との合同キャンプに参加するため、英会話力が必要であった。この英語講座には英語力が高い隊員が選出され参加していた。そのため、かなり高度な内容の講座であった。会話が中心で、会話力向上のために必要な技術を身に付けることが大事であった。普通の大人や社会人が英語を学ぶのとは違い、自衛隊には特有の目的がある。それを達成するために、隊員たちは熱心に英語学習に取り組んでいた。アメリカ人は日本語の影響が残る英語の発音に慣れていないため、なるべくはっきりきれいに言わないと誤解を招く恐れがある。会話のためには発音が大事だと伝えながら、発音修正にも取り組んだ。

1回の講座は3ヶ月間であった。駐屯地で隊員と話をして、彼らの訓練を垣間見ることは普段なかなかないことである。実際このような経験は、後にも先にもこの時だけである。自衛隊の講座では、高いレベルの英語を使い、様々なテーマについて意見交換をしたり、そのなかで文法を教えたりした。修了時にはスピーチコンテストを行った。そうした学習が隊員たちのパフォーマンスに反映されるのが、私にとってとても価値のあることだった。こ

の講座を、他のアメリカ人と一緒に2年間にわたり担当していたが、スクールの経営者の退職にともない講座も終了となった。この講座が終わったことをとても残念に思った。

#### IV. 新たな挑戦[エジプト・サウジアラビア](2015～現在)

##### 1. 母校の大学院が抱える問題を打開したいと考える

自衛隊の講座が終わった数か月後、エジプトに帰国することになった。帰国後、母校のインシャムス大学で博士号取得の承認を経て、正式に同大学外国語学部日本語学科初のエジプト人講師となった。2005年に同大学の助手となり学部学生に約1年間翻訳を教えて以降は日本にいたため、その間無給休暇という扱いだった。しかし、帰国したことで休暇を中断し、本格的に仕事に復帰することとなった。

インシャムス大学の日本語学科には、いまだ専任のエジプト人講師や教授がおらず、国際交流基金派遣の日本人教師や、エジプト人の助手兼大学院生ばかりがいた。国際交流基金派遣の日本人教師は任期が3～4年しかない。そのため大学院生は、カイロ大学の先生を頼り研究相談をしなければならなかった。大学院生にとって、他の大学に通い見知らぬ先生にアドバイスや意見を求めることはやや難しく、あまり気持ちのよいことではなかった。また、カイロ大学の先生は厳しく、研究計画書を認めてもらう段階までなかなか辿りつけなかった。その状況を打開するため、何か手伝いたいと思った。

まず、助手兼大学院生たちは助手の仕事で忙しく、指導教授と研究についてゆっくり話す時間がなかった。私は年度の途中で仕事に復帰したため授業を担当しておらず、時間に余裕があった。それで彼女たちの予定に合わせ、いろいろと相談にのった。研究計画書を読み、良いと思うところにマークをしたり、目的が不明瞭でより説明が必要だと思うところにコメントしたりしながら、より良い研究計画書が書けるようサポートした。彼女らは助手としてはしっかり仕事をしているが、大学院生としては修士論文執筆に非常に苦しんでおり、適切な支援が必要であった。大学院にはそれぞれの大学院生の研究内容に合った授業がなく、言語学の基礎さえ知らない院生が何人もいた。そうした状況に心が痛んだ。当時12人ほどの大学院生がいたが、私に手伝いを求めたのは3人ぐらいであった。都合によりエジプトには半年しかいらなかったが、その間に彼女たちにできることを行った。

最近、当時相談に乗った2人の助手が無事に修士号を取得した。苦しかったと思うが、そこから得た教訓もあると思う。大変な状況下でもあきらめず努力を続け、修士号を取得するまでに至ったことは、とても素晴らしいことだと思っている。彼女たちの役に少しでも立てたことを嬉しく思う。

##### 2. 新しい教育観や困難に出会い、実践しながら自分のやり方を調整する

エジプトに帰国してから半年後、再び主人の転職でサウジアラビアに引っ越すこととなった。サウジアラビアはアラブ諸国の一つでありながら、エジプトとは文化が全く異なる。女性の権利が限られている雰囲気の中、日本語を活かせる仕事を探したがあいにく見つからなかった。当時、息子の入学手続きのためやりとりをしていたNADA インターナショナルスクールの校長が、その学校で英語教師として働くことを提案してくれた。日本語を使う仕事の機会がゼロに近いこの国で仕事をするには、その提案を受け入れるしかなかった。正直に言えば、英語よりも日本語の先生になりたかったが、現況では無理であった。

2016年10月から、NADA インターナショナルスクールで英語教師として働き始めた。この学校にはサウジアラビア人に加え、世界各国からの生徒が集まっている。皆背景がそれぞれである。これまで私はアルバイトや非常勤等で週に何回、1回に何時間という働き方をしていたが、この仕事で初めて専任の教師として働き、教師の本当の責任を味わっている。ここでは、主に2つの新しい挑戦をしている。

一つ目は、これまで経験したことのないカリキュラムでの教育である。この学校は私立の学校で、イギリスのオックスフォードのカリキュラムに従っている。私はエジプトで英語を中心に教える私立の学校を卒業したが、そこでのカリキュラムはエジプトのものに従うものであった。オックスフォードのカリキュラムに従って教えられるように、まず自分がそれを意識して分かっている必要はない。オックスフォードの教授法は詰め込み型ではなく、子どもが主体的に学ぶスタイルをとる。「コミュニケーション(communication)、協力(collaboration)、創造(creation)、批判的思考(critical thinking)」という4つの「C」を応用しなければならない。そのためには、しっかりと週間計画が必要となる。授業の進め方、実施する活動、応用する方法を全て詳細に明確に記載しなければならない。最初は面倒くさく時間の無駄だと思っていたが、時間

が経つにつれ、計画がないとなかなか進まないことが分かり、その重要さを理解した。様々なレベルの生徒たちが集まる教室で、全員に分かってもらうことが最も大事であり難しいことである。すぐに分かる生徒もいれば、何度も繰り返したり言い換えたりしないと分からない生徒もいる。きちんと準備をし、かつ「プランB」を持たなければならぬ。最初は戸惑うことが何度もあったが、今ふり返ってみると、「あの時にこうしていたら、こうならなかっただろう」、「あの時こうやっていたら、ああなかっただろう」と考えることができる。教える内容を理解することが第一、その内容を進めるための準備が整っていることが第二であると思う。また、自分ではなく生徒たちに合ったやり方にするべきなので、一つの方法だけではなく、いくつかの方法を試してみることも重要である。

二つ目の挑戦は、小学6年生の男子クラスの子どもたちに教えることである。この年齢の男の子が大勢集まるクラスを担当するのは、私にとって非常に困惑するものであった。とてもおとなしく勉強熱心の子もいる一方で、行儀が悪くいたずらばかりする子もいた。こちらが常識だと思えることが分からない子どももいた。そうした子どもは、私が説明している間、話の途中で割って入る、変なコメントをする、宿題をしない、教科書や道具を持ってこないなど困ったことばかりしていた。彼らは、私が女性だから大した行動はできないと思っていた。それを否定するためによく怒鳴りもしたが、効果はなかった。そのようなことの連続のなかでひどく落ち込み、泣く時もあった。しかし、やはり私のやり方に何か問題があると考え、自分のアプローチをもう一度見直し、違う作戦を試みることにした。例えば、あまり悪影響がない行動は一つ一つ指摘するのではなく、見て見ぬふりをした。指摘するとむしろ続くので、気づいていないふりをし、普通に授業を進めた。また、悪ふざけをしていた子どもたちに責任のある仕事を任せた。例えば、次の授業の先生が教室に来るまでの間、ホワイトボードの準備をしたり教室にいるクラスメイトをみておいたりすることである。進歩や成長があれば、ささいなことでもクラスの友達の前で褒めた。数週間でその成果が見られた。ずっと悪い行動をしていた子どもたちが授業に関心を持ち始め、自信を持ち自ら手を上げ積極的に参加するようになった。更に、注意力が散漫な子どもが先生の注意をよく聞き、それに従って真剣に勉強するようになった。年度が終わりに近づくと、子どもたちとの信頼関係ができていた。最初はとても大変だったが、それは実りのある苦しみだったと思った。そこから大事な教訓を得ることができた。

今年度は男子には教えておらず、女子にのみ教えている。女の子の方がずっとおとなしく、指示もしやすい。今年度は小学4年生と6年生、中学1年生に教えている。4年生は私の息子と同年齢であり、彼女らに教えることにより、息子との関係の取り方やコミュニケーションの仕方がより上手になった気がする。今の私は、昨年度苦い思いをした中学1年生になった男子生徒たちに再び教えたい気持ちになっている。去年失敗したことから学んだ教訓を生かし、生徒たちと更なる絆を築きたいと思っている。

## V. ふり返り、気づくこと

ふり返ってみると、今まで積み重ねてきた経験のなかで、大事な教訓を得てきていることに気づく。実は、私は大学に進学する前、日本語のツアーガイドになりたかった。卒業後たまたま機会があり同大学の助手になったが、当時、助手の仕事にあまり興味が向かなかった。しかし、あきらめずに続けるなかで、その仕事から多くのことを得ることができた。

日本でも、自分の研究を進めながら学外の活動として自分の好きな仕事を探してみたが、結果として主に英語教師の仕事が紹介された。いろいろな人と出会い多様な価値観や考え方に触れるなかで視野を広げることができた。英語教師をする傍ら、フリーランスでアラビア語、日本語、英語の翻訳・通訳を行った。私の専門は日本語教育・言語学ということもあり、その仕事には自分の力を込めることができた。この仕事が向いていると思い、一生続けたいと思うようになっていた。

再びエジプト、そしてサウジアラビアに引っ越すことになった際、次こそがチャンスだと考え、日本語教師の仕事を一先懸命探した。しかし、やはり今回も英語教師の仕事が私を待っていた。現在サウジアラビアでは、インターナショナルスクール、いわば学校の教員として働いている。これまで自分が学んできたカリキュラムや教育制度とは異なるものに出会っており、それに自分を適応させる努力をしなければならない。それはしばしば苦勞を伴うものであるが、今は子どもたちと共に勉強し、自分の教師としての力を更に磨いていこうという思いでいる。ここで立ち止まるのではなく、最新の教育を研究しながら、子どもたちの役に立てるよう成長を続けたい。

## 長期に渡る経験を跡づけ、吟味することの意味—新たな言語教育への提起(半原芳子)

ヤスミンさんの長期実践研究報告に同行した私は、



実は2002年にアインシャムス大学で出会っている。当時私は新米の日本語教師で、ヤスミンさんは学部2年生だった。今回ヤスミンさんの大学卒業後から現在に至るまでのふり返りに同行するなかで、お互いに離れていた期間の彼女の経験を追体験させてもらった。記録を読みながら、「あれからこんな出会いがあったのか」、「こんな出来事を経験してきたのか」、「困難に直面した時このようにして乗り越えてきたのか」と、驚きや共感や感心の気持ちを持つと同時に、たくさん聞きたいことも湧き出てきた。例えば、「この時はどんな気持ちだったのか」、「この時どうしてこのように判断したのか」、「今ふり返ってみてこの時のことをどのように感じているのか」等である。冒頭にも述べたように、ヤスミンさんと私との間では、数え切れないほどのメールのやりとりを行った。

はじめヤスミンさんの記録は「概要」のようなものであった。そもそも、これまでの経験をふり返りそれを書き表すこと自体、彼女にとっておそらく初めての経験であり、さらにそれを第二外国語(ヤスミンさんにとっては第三外国語だろうか)で行うのだから無理はないと思った。また、現在いるサウジアラビアでは、日本語を使う仕事や活動にかかわれていないことが記録から読み取れたため、そうした環境も影響しているのだろうと想像した。しかし、応答を重ねるなか、ある時からヤスミンさんがどんどん記録を加筆し送ってくれるようになった。溢れんばかりの日本語で、その様子はまるで堰き止められていた水流が勢いを持って放たれるような感じであった。そして、私とのやりとりのなかで、彼女の日本語がどんどん上達していくのを感じた。「上達」と言うと語弊があるためもう少し詳しく述べると、ヤスミンさんは「自分で自分の経験を語る言葉」を手に入れていっていた。おそらくヤスミンさん自身も、この過程を楽しんでいたのではないだろうか。ある時添付されているファイルを開いたら、わずかの時間のなかで驚くほどの分量が加筆されており驚いたこともある。

言語教育、特に成人の言語教育は本来こうであるべきなのではないだろうか。言葉で自分の経験を表現し、それを聴き手の存在と応答のなかで意味づけなおしたり、経験のつながりを見出したり、自分の成長を発見したりする。自分の言葉で自分を成長させていくのである。

私は、言語は人間の根幹であると考えている。私たち人間は言葉によって感情を耕し、意志を育て、思考を培うことができる。確かに、テキストを使って単語や文型を覚えることも言語学習の一つの形だろう。しかし、大人には豊かな経験がある。その長い経験を跡づけ、吟味し、そして

自分が経験してきたことの価値を画策しながらも探り当てたならば(探り当てようとするならば)、そこには自然と自分が生きていることへの肯定や、自分の生をより良く全うしようとする力が生まれてくることだろう。それは、まさに人の成長と生きることを支える言語教育だと言える。

ことばの教師(実践者)の成長を支える「実践研究」のあり方への問いと言語教育のあり方への問いは、実は不可分の関係にあるのだろう。本稿の執筆を通じ、大きな問いに辿り着いた。今後ヤスミンさんと共に、この問いを探究していけたらと思っている。

#### [註]

- 1) 『Tasting Japanese Culture: Through diverse interpretation』(2011)
- 2) 『ムスリムの学生生活—ともに学ぶ教職員と学生のために』名古屋大学留学生センター・名古屋大学イスラーム文化会(2012)  
<http://acs.iee.nagoyau.ac.jp/doc/interculture/201510muslim.pdf>

#### [参考文献]

- 1) 福井大学教育地域科学部教授会(2002). 「21世紀における日本の教師教育改革のデザイン—地域の教育改革を支えるネットワークと協働のセンター」福井大学大学院教育学研究科学校改革実践研究コース編『実践コミュニティと省察的機構』, 209-226.
- 2) 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻(2014). 『長期実践研究報告について』福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻.
- 3) 松木健一(2004). 「ロングスパンの学習活動を支える物語としての記録」福井大学教育地域科学部附属中学校研究会『中学校を創る 探究するコミュニティへ』東洋館出版社, 187-198.
- 4) 柳沢昌一(2010). 「アイデンティティの時間 / コミュニティの時間」『福井大学教職大学院Newsletter』27, 379.
- 5) 柳沢昌一(2011). 「実践と省察の組織化としての教育実践研究」『教育学研究』78(4), 423-438.
- 6) Knowels, M.(1980). *The Modern Practice of Adult Education: From Pedagogy to Andragogy*. Person Education. [堀薫夫・三輪建二監訳『成人教育の現代的実践』鳳書房, 2002]
- 7) Schön, D.A. (1983). *The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action*. Basic Books. [柳沢昌一・三輪建二監訳『省察的実践とは何か』鳳書房, 2007]
- 8) Schön, D.A. (1987). *Educating the Reflective Practitioner: Toward a New Design for Teaching and Learning in the Professions*. Jossey-Bass. [柳沢昌一・村田晶子監訳『省察的実践者の教育』鳳書房, 2017]